○ZEC 理工学部 工業化学科 学生委員会

―理論合宿――へこたらなる理論武装を!!

政治局発行
文責―政治局

I 学園斗争の指導の環
II ポツダム自治会連動＝国際連動の立場と国共斗連動
III 70年安保と国内国共斗

I 学園斗争の指導の環

貫徹がし

50年代後半から60年代半ばまで展開された日本帝国主義の高度成長期においては、教育資本がその価値増殖において、相対的独自に「大学の自治」なる形で自己の共同性を「理念的幻想」として形成する条件を残していた。こうした理念的幻想を外被とする共同性の領域における活動はその一枠一のでの み成立していた。しかし60年代半ば、超重化学工業と国家力頭制支配を軸とする産業社会資本が成立に対応して、大学の帝国主義的再編が推進されていった。日米軍事的な安保体制に対外膨張に進転した日帝は個別教育資本に対しても、対外侵略―反革命に貢献する「国民社会分業体制」の再編の一環としての再編を図っている。

かかる中枠は「理念的幻想」にその存在の根拠を有していた市民社会の分解にその表現を見出すであろう。それは同時に、かって60年代前半において、それなりの「理念形態」を持っていた「大学の自治」を内部の外被とする「理念的幻想」の崩壊 程でもあった。こうした中で学園を活動している学生、院生等自らの学園闘争自治会の連合体「全学連」として新結化されていった。これが「ポツダム自治会」である。そして、その運動の軸は民主主義原理に基づく人市民主義意識に支持されたそれを拒否せんとし、それへの感性的反抗を対象的認識活動に媒介されぬまま直接的に「帝国主義大学解体」へと自己存在を通じる内で表現されるにすぎなかった。

我々の学園斗争の第四期的推進の立場は「大学解体」と真理の大学」を堅保物神・自治村の砦へ」「帝大解体」「人民大学」「大学革新」等の主観主義、改良主義、サンディカリズムではない。帝国主義大学の解体は、プロレタリアートを軸とする諸階級の帝国主義打倒斗争と結合し、発展させる中でしか実現出来ないし、この場合、政治斗争との関連、 の内で追求されねばならない。

〜即ち「帝大解体」は、個別学園斗争の一課題―、の

II 全学連連動に換る新たなる組織の型と全共斗M

60年代以来の我々の組織の型は、成田アメリカ(横須賀(G.H.Q)の学制改革方針の下での全員加盟制―オープンショップ制として 各学生自治会の連合体「全学連」として制度化されていった。これが「ポツダム自治会」である。そして、その運動の型は民主主義原理に基づく人市民主義意識に支持されたそれを拒否せんとし、それへの感性的反抗を対象的認識活動に媒介されぬまま直接的に「帝国主義大学解体」へと自己存在を通じる内で表現されるにすぎなかった。

我々の学園斗争の第四期的推進の立場は「大学解体」と真理の大学」を堅保物神・自治村の砦へ」「帝大解体」「人民大学」「大学革新」等の主観主義、改良主義、サンディカリズムではない。帝国主義大学の解体は、プロレタリアートを軸とする諸階級の帝国主義打倒斗争と結合し、発展させる中でしか実現出来ないし、この場合、政治斗争との関連、 の内で追求されねばならない。

〜即ち「帝大解体」は、個別学園斗争の一課題―、の